

陳凱歌監督インタビュー 於・箱崎ロイヤルパークホテル・1階喫茶室
1990年4月25日 2:00~3:30
聞き手 橋爪大三郎 通訳 池小寧（映画カメラマン）

——陳凱歌さん、今日は本当にお忙しいところ、わざわざお時間をとっていただいて、感謝しています。「黄色い大地」(84)「大閩兵」(85)「子供たちの王様」(87)はどれも面白く拝見し、いちどお逢いしたいと思っていました。

私は、ほかの人びとと一緒に、日本ポピュラー音楽学会準備会というのをやっています。私は中国のポップスやロックに興味をもって、いろいろ調べたりしています。今日は、音楽と映画の関係など、お伺いできればと思います。

陳 中国の音楽に興味がおありということなら、この6月に、NYに住んでいる中国の音楽家、瞿小松という人が来日することになっています。彼の作品は、とっても面白いですよ。彼は、貴州省の出身でしてね。貴州には、苗族（ミャオ族＝少数民族の一つ）の人びとが大勢います。だから、彼の音楽には、少数民族の音楽の特徴、南方の地方色があらわれていて、とても面白いのです。今度、彼のカセット・テープを貸してさしあげましょう。

—— それは、どうもありがとうございます。

2年まえに北京に行ったとき、「西北風」(Wei Bei Feng) というのが流行っていました。とても面白かった。中国の昔からの音楽と、ロック(摇滚) とが合わさって、独特のものになっている。

陳 あれは、あんまりよくないと思うなあ。いまいちですよ。最初は実験的で、面白かったが、たちまちすっかり商業的なものになってしまった。

—— わかります、わかります。そういうのも、いっぱいある。

で、陳凱歌さんの「黄色い大地」が、1984年ですよ。あの映画が公開されたことも、「西北風」みたいな動きの、ひとつの源泉になっているのではないか。ああ、こういう中国独自の世界もあるのだ、とみんな気がついた……。

陳 それは、きょうと、影響があったでしょうね。

—— 映画の最初のところで、「信天游」という民歌についての説明が字幕に入って、共産党軍の兵士がこの民歌を採集にいくという、映画のストーリーになっている。実際そういうふうには、革命歌を黄土高原地域(陝西省北部)の民歌から沢山作った、ということのようですが、その後、しばらくそういう音楽は忘れられていた。でも、あの映画でもって、台湾でも香港でもない、中国大陸の音楽もいいじゃないか、とみんなが思うようになった。もちろんそれは、映画がとってもよかったからなんですけれども……。

注：「東方紅」もそうである。

陳 それはその通りでしょう。しかし、時代につれて変化したということもあるのではないかな。

私は、もともとものが、好きなのです。けれども、それをまったくそのまま、現代に持ってくるのは、困難だということもわかっていますから、少なくともある程度、発展させることを考えないと。ただ、発展のさせ方と言っても、現在のところ、いろいろ問題があるだろうねえ。

—— あれは、監督第一作目でした。それで、黄河上流の陝北地方を舞台にして、音楽

を題材にした映画を作った。これには、なにか、ひらめくものというか、勘というものがあつたのでしょうか。どういう気持ちで作ったのでしょうか。

陳 いくつか原因があると思いますけど、第一にはね。あの地方の民歌がとっても有名だということです。第二の原因は、民歌がもともと象徴性をもっているからだ、と思う。1984年の頃、中国の文化界にはひとつの風潮(動き)があった。自分たちの文化の「根」はいったいどこにあるのだろうと(「尋根」)。そこで私は、そちら(陝西)に目が向いたわけです。

自分でもうまく言えないんだが……、ヨーロッパやアメリカのロックは好きだけれど、東方(アジア)の、中国のいまの改造されたやつはいただけないなあ。中国のロックでいいのは、一人だけだよ。崔健ツイェンはいい。

・ 東芝EMIから、この夏にも「一無所有」というアルバムが発売される予定だったが、売れそうにないということで、目下見合わせているとき。

—— 私も、崔健は大好きです。

陳 とてもいい。

—— ええ、彼の作品はみんな持っています。

陳 瞿小松は、6月日本に来る予定だから、連絡をして、一緒に逢える機会を作りましょう。

—— それはぜひ、お願いします。どちらにでも、ご案内します。

陳 今度私が撮る作品も、彼が音楽を担当するのです。

—— 陳凱歌さんの映画は、若い人びとにとっても支持されている。音楽でも、崔健とかいろいろ新しいものが出てきた。若い人びとは、いま中国をどういうふうにしていったらいいのか、自分がどういうふう生きていったらいいのか、非常にわかりにくいんだろうと思う。だから、中国は本来こういう姿をもっていたのだ。だけれど、ここをこういうふうに変えて進んでいこう。そんな提案を、とっても求めている。そういうことが感じられる作品が、支持されていると思うんですけど、どうでしょう？

陳 それは、とっても大きな問題ですね。答えにくい。実は私も、これをつねづね自問してきたのです。

中国の文化の伝統や芸術の表現形式をどうやって守っていけばいいのか、まだまだ研究が足りません。中国には基本的に言って、二つの態度があります。ひとつは、中国の伝統をそのまま守っていけばいいとする態度。たとえば、中国の京劇とか墨絵とか。けれども、芸術のかたちは日常生活ともともと不可分のものでしょう。墨絵にしても、生活のなかからさまざまな表現をみつけていく。でも、毎日毎日仕事に出かけたり帰宅したり、人はぎゅうぎゅうで、どちらを向いても現代のものばかり。これでは、墨絵の創造的活動なんてできっこない。



陳凱歌(チェン・カイコー) 1952年北京生まれ。父親も映画監督だったが、初等中学のときに文化大革命が起こり、'68年、16歳で雲南省のゴム園に下放する。'78年、北京電影学院監督科に入学。'84年に「黄土地」(邦題「黄色い大地」)でデビューし世界の映画人の注目を集める。その後「大閩兵」('85年。同「大閩兵」)、「孩子王」('87年。同「子供たちの王様」)を監督し、現在は在N.Y.。次作「LIFE ON STRING」(同「命は琴の弦のように」)は今年夏クランク・インし来年公開される予定。

もうひとつの態度は、中国の伝統的なものは何もかもだめだ、西洋のものがいいのだ、という考え方です。たとえば、油絵なんか、そうです。だけど、西洋では油絵を、もう一千年も描いているわけです。中国人がどんなに努力しても、同じレベルになることなんかできない。

ですから、若い芸術家たちの問題は、これからどうしたらいいのか、ということなのです。これは、とてもむずかしい問題です。

—— ほんとにそうですけれども、でも、日本人である私が見て、とても感動を受ける作品が多いというのは、なぜかという、苦しんで出てきたものは、やっぱり本物だと思うんですね。日本人が作るものはいま、あんまりいいものがないので、中国の方が作るものにとっても関心があります。

陳 それはその通りだと思う。それは多分、第一に、中国では、国家が多くの問題に突き当たっているからだ。そこで中国人は、とても愛国的な民族だと言える。だから、中国人の作品には、国家に対する配慮や関心がとても多くみられる。第二の原因は、中国社会がまだそれほど商品化されていないことだ。

芸術に対して判断を下すことのできる規準には、三つあるのではないかな。ひとつは、観客です。もうひとつは、お金、つまり経済的な利益です。もうひとつは、時間。世界的にみて、どれだけ時間がたっても、いい作品とみとめられるようなものは、非常に少ないです。中国にも、芸術家は多いし、才能のある人も多い。でも、沢山の観客に受け入れられれば満足、経済的に成功してお金が入れば満足、というのが大部分で、時間が経っても残るといふ作品はわずかじゃないのかな。

—— そういうこともあるかもしれない。でも、「子供たちの王様」の、小学校の先生なんかを見ていると、そこが中国だとか、いつごろのことだとかいうのを忘れて、日本人にとっても忘れられないような人間のあり方、生き方みたいなものを教えてもらったような気がする。

陳 どの民族にも共通するものを、人間は持っているのでしょうか。芸術の方面で言えば、私はもう“老年”の域だと思うが、でも、自分の見つけたものに自信があるので、自分の道を行こうと思います。

—— それはぜひ、そうお願いします。

少し話を戻すと、その—— 古い中国のままでもだめ。新しい外のものを取り入れるだけでもだめ。その中間だと思うんですね。それで、陳凱歌さんの作品だと、古い中国を描いている部分もある。中国人をとにかく描いている。だけど、描き方がとても新しい。たとえば、カメラがよかったり、筋が面白かったり。新しい工夫がいっぱいある。古いところと新しいところがうまくくっついていると思うんです。

崔健さんのもそうで、ロックとか、唱い方とかいうのは新しい。でも、古くからの中国の音楽とか、感じ方みたいなものもよく入れている。それがうまく、結びついている。そして両方とも、この地方（陝北）と関係がある。そこがひとつ、面白いと思います。

陳 この地方は、もともと、黄河のまん中にあたるのです。実際、漢民族の文化の発祥地だと言ってもいい。地理的にみると、この地方（中国西部）は比較的標高が高く、中国東部は比較的低い。そこで、中国の歴史は、ずっと、西に始まり東に波及していくというパターンだったのです。中国共産党だってそうです。延安から、東に進んでいった。

—— そうすると、この場所は中国の、心のふるさと、と言っていいのですね。

陳 なるほど、そうかもしれない。でも、中国は地方地方の特色が強いから、みんながみんな、そう思うとは限らないけれどね。

機会があれば、この地方（陝北）に行ってみれば、わかるから、ぜひ行ってごらん下さい。特に、音楽に関する素材はものすごく豊かです。

豊かな社会に暮らしている人びとにとって、精神生活はとても重要だ、と私は思う。

—— 「黄色い大地」のなかにも、歌を唱う人が出てきませんが、あれは、その土地の人をそのまま使って、唱ってもらったんですか。結婚式のシーンとか。

陳 あれは全部、地方の人。あの地方の一般の民衆です。

—— 張軍釗監督の「一人と八人」という映画がありましたが、あれも 84 年でしたね。

陳 あれは、「黄色い大地」より、半年前です。

—— でも、公開されないで、オクラ入りでしたね。

陳 匪賊と共産党を描いていました。匪賊が愛国心を持っている、とは認められないので、論争になって、公開できなくなってしまった。

—— でも、日本ではやっと最近公開されて、私も観ました。とても面白かった。あれを観ると、「紅いコーリャン」とも似ているし、いろいろな映画に影響を与えたのではないのでしょうか。

陳 それは、「一人と八人」のカメラが張芸謀で、あとで「紅いコーリャン」の監督をしたからでしょう。「一人と八人」を撮るときに、彼は非常に影響をうけたのではないかな。「一人と八人」と「紅いコーリャン」は、たいへん似ている映画だと思う。

張芸謀監督の新しい映画、「菊豆」は観ましたか？

—— まだ、観てません。

陳 まえの二つの作品と比べて、あなたがどう感じるかと思って。

—— そうですね。楽しみにしています。

去年から、民主化運動っていうのがありましたね。あれも、若い人たちの運動だと思うんですけど、そういう運動と、ここ四、五年のいろいろな映画や音楽や、芸術の運動と、どこかでつながっているように思うんですけども。

民主化運動をやっているのは、二十代の若い人たちですよ。芸術のほうは、もっと年上の、紅衛兵世代の人たちですけど。このふたつの年代の人たちの関係っていうのは、どうなっているのでしょうか。

陳 ふたつの年代の人びとは、だいぶ違うと思う。

同時代の青年たちのあいだには、世界各国、経済発展の度合はいろいろに違って、ある程度の共通性がある。中国の三十、四十代の紅衛兵世代の人びとは、ある程度、日本の安保（全共闘？）世代の人びとと共通しています。いまの中国の若い人（二十代の人）は、アメリカやヨーロッパの若い人びとと似ている部分がある。

若い人びとは、あまり深く問題を考えられていない。何と言うか…… 実際、経験がずいぶん違いますねえ。私たちは、困難な経験を重ねてきている。文革世代の人びとは、かつて、いまの政府の制度をとて信じていたし、それに対する情熱も持っていた。そのあと、制度に問題があることがわかった。いろいろな事件があって、夢がなくなってしまいました。自分の希望も自分のやりたいことも、みんななくなってしまった。こういう辛い経験がある。だからわれわれの世代は、多くの問題を考えるし、深く考えます。しかし、いまの二十歳かそこらの若い人たちは、そんなに多くを考えません。

大学生たちは、たいてい1968年、1969年以降の生まれでしょう。彼らは過去十年あまりの、ある程度安定した時代に成長してきた。彼らは、中国がもともと、自由な国でなければならぬように思っている。けれども、文化大革命のなかでどんなことが起こったのか、どんな経験があったのか、全然知らないのです。

これは、日本でも似ているでしょう。いまの日本の若い人たちは、年配の人びとの経験を全然聞き出せないはずですよ。

文化大革命が終わって以来、中国には非常に大きな変化がありました。以前にくらべて、開放と自由が進みました。だから、いまの運動が可能になった、と私は思います。二十年前には、こんなこと全然考えられない。

—— この本（「私の紅衛兵時代——ある映画監督の青春」講談社現代新書、刈間文俊訳、1990年6月刊）を読んで、やっぱりそういうことを非常に感じたんです。日本の若い人なんか、やっぱりそうなんです。苦勞を知らないということがある。だからぜひ、この本を読んでもらいたいと思う。この本だけじゃなくて、われわれの世代とか、もっと上の世代の人びとが、いろんなことを発言しなくちゃいけない。

芸術ってというのは、そのための、非常に大きな武器だと思います。実際に人びとに苦勞をかけることはできないから、その代わりに、芸術で解ってもらおう。

陳 それに賛成です。芸術家は、自分の感じることを、みんなに向かって表現する義務がある。

中国の状況は、日本と比べて、ひとつよいところがあるかもしれない。中国の若者たちは、本を読まなければならぬ。外の世界でどういうことが起こっているかを、とても知りたいと思っているからです。中国では、制限のある環境のなかで、活動しなければなりません。この部分は、私たちの世代と、いまの若い世代に共通するところだと思う。苦しみや辛い経験をなめている。苦しみがあるというのは、そんなに悪いことじゃない。まったく苦しみがなくして順調すぎるのは、そんなにいいことじゃない。でも、全部が苦しみだったら、それは文字どおりの苦しみになってしまう。ある程度、苦しみも必要、ということなのです。

—— そうです、そうです。苦しみを、そのまま苦しんでいては、それだけなんだけれども、それを、本にしてくれる。映画にしてくれる。そして、音楽にしてくれる。ほかの人にわかるかたちにして伝えてくれると、それは、宝物になると思うんです。

陳 私もそう思う。この本を書くときも、もちろん全部が事実なのだけれども、それを事実として書くだけではつまらなくなるから、いろいろ文学的な表現方法を考えてみました。みんながそこから、なにかを感じられるように書いたのです。

—— それは、とてもよく書けていると思います。翻訳だから、細かいところはちょっと判らないけれど、おそらく中国語もすばらしいんだと思います。そして、まるで映画を観ているような、そんな感じがしました。

陳 これは職業柄で、仕方ないかなあ。私はもともとが監督だから、書くとき、どうしてもシナリオかなにかのようになってしまう。私は大学時代、練習で、セリフがなく、ただ人の動作によって物語をつくる、なんていうことをやってみました。こういうことをすると、読む人は興味をもってくれるから、ただ会話だけで進めるよりも、人を感動させる力があるのです。

日本の作家、三島由紀夫は、読んで非常に映画を感じさせる作品を書いていますね。

三島の作品は、中国語にも訳されているけれども、読んでいい作品、映画的な作品が多い。中国語の翻訳を読んで、日本語の素晴らしさ、日本語の美しさを同時に感じた。

—— あ、そうでしたか。

この本が映画みたいだ、と言ったのは、必ずしもシナリオとか台本に似ているという意味よりも、書いている陳凱歌さんが、あたかもカメラになりかわったのように、ものをしっかり見ている。そして、それを思い出してありありと伝えている。そしてそこに、何て

言うか、優しさとか苦しきとか、そういう人間の心も全部伝わっているっていう、そういう意味なんですね。それはおそらく、映画を作っていたから、文章もそういうふうになくなったんだろう、という気がするんです。

構成もすばらしいし、文章もすばらしいし……。映画にも、「文体」っていうものがあると思いますけど、あれだけ端正で、完成された映画の「文体」をお持ちの方だから、これだけの作品が書けて当然という気がします。

陳 そう言っていたら、ほんとに嬉しい。

—— 今はまだ4章までしか、翻訳ができていません。そこまで読んでの感想ですけども。第4章では、いろいろな方が亡くなって、たくさんの人たちが不幸に襲われます。一種人間の狂気とか、煩悩の深さとか、もうどうしようもないような話がたくさん詰まっているんです。最後の、お友達のお姉さんのKさんという方の、すさまじいセリフが忘れられません。で、とっても重くなるようなところで、章がパッと終わるんです。

陳 書けば書くほど、筆が乗って来て、自分がそのなかにのり移るような感じになっていきました。私自身は、最後の第5章が好きです。北京を離れて、下放で雲南に行くのです。あの時代のことだから、私にはいい思い出があります。

—— 雲南の森が、みんなを救ってくれる——そういう章になるんでしょうか？

救われるようなね、そんな第5章が用意されてるんだなと思うと、なにか安心するし、楽しみだし……。

陳 自分でもこれは美しく書けたと思っています。時間の経過は、お酒を造るのに似ていて、時間が長いほど、美しさが増してくる。あの頃からずいぶん時間がたったから、美しいと感じるのですけれどね。第5章は、それだけで独立の物語にできると思います。前の4つの章を見ないで、これだけでも。

たぶん、皆さんの印象は、第5章に集まるのではないのでしょうか。

—— 実は私、この本の書評をすることになったんです。原稿用紙で3枚半なんですけれどね。「週刊読書人」という書評の新聞に。ほかにも、機会があれば書評をしたいし、知り合いの人にも勧めて、あちこちで取り上げてもらいたいと思っています。

陳 出版社の人は、本を書いてくれと依頼した時点では、私にこんな本が書けるかどうか、多分ちっともわからなかったはずですよ。それなのに、書くように言ってくれたわけで、私は非常に感動しました。ぜひともいい本にしたいと、一所懸命に書きました。

—— 以前、雑誌のインタビューで、文革とか、ベトナム（中越）戦争当時の体験を語っておられましたが、その時、この人は、語っても語っても語り切れないほどのことを、きっとたくさん持っておられるのだろうな、と思いました。今回それが、素晴らしい作品になって、私たちにも読めるようになったということで、感激しています。

たくさん売れるといいですねえ。続きの5章の原稿を、読ませていただくのが本当に楽しみです。でも、そろそろ飛行機の時間ですね。

陳 今度、東京へ来て、皆さんとお目にかかり、いろいろお世話になって、ありがとうございました。これから、私に書けるようなテーマがあったら、またお願いします。

—— 今日はほんとうに、ありがとうございました。